



誘惑する家庭教師：  
シドニー・オーエンソンのエドマンド・バーク批判

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 美津子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00011048">https://doi.org/10.24729/00011048</a>

# 誘惑する家庭教師

—シドニー・オーエンソンのエドモンド・バーク批判—

鈴木美津子

アイルランドの自由を擁護し、英国の圧制を非難し、女性の政治的・経済的自立を求めて、<sup>1)</sup> 精力的に執筆活動をおこなったシドニー・オーエンソン、後のモーガン令夫人 (Sydney Owenson, Lady Morgan, 1776? – 1859) は、アイルランド出身の最初の女性職業作家とされている。彼女は父親の破産後、自活するために住み込みの家庭教師となったが、ファニー・バーニー (Fanny Burney) が『カミーラ』 (*Camilla*, 1796) の出版によって、三千ポンドの収入を得たことを知り、小説のもつ経済的価値に思いいたり、小説家になろうと決意する。<sup>2)</sup> 家庭教師をするかたわら、書き上げたのが、『セント・クレア、またはデズモンドの女相続人』 (*St. Clair; or, the Heiress of Desmond*, 1803) である。この小説はまずまずの成功をおさめ、彼女は家庭教師をやめ、父親、妹、乳母を養うため、筆一本でたつ決意を固める。三作目の『奔放なアイルランド娘』 (*The Wild Irish Girl*, 1806) は出版されると大成功で二年間に七版を重ねる。この後、約四十年間に、彼女は小説九冊、コミック・オペラ、随筆、サルバトール・ローザ (Salvator Rosa) の伝記、二冊の旅行記、詩集、自伝、歴史書、論評と、合計七十冊もの著作を刊行する。彼女の作品に一貫して流れているのは、不当な抑圧への反発・嫌悪、自由を求める急進主義的傾向である。彼女はアイルランドのカソリック教徒にもプロテスタントと同じ権利を要求し、あらゆる法的制限の撤廃を求め、フランス革命に賛同し、イタリアの政治的自由を求める戦いに共感した。<sup>3)</sup> 彼女は、晩年には女性作家としては初めて、皮肉にも攻撃対象であった英国政府から年金を与えられている。

本稿では、アイルランド人家庭教師と准男爵の孫娘との崇高な恋愛を描いた『セント・クレア』を取上げ、この作品がゲーテ (Johann Wolfgang von

Goethe) の『若きウェルテルの悩み』 (*Die Leiden des jungen Werthers*, 1774) とジャン=ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau) の『新エロイーズ』 (*Julie, ou la Nouvelle Héloïse*, 1761) を下敷きにして書かれていること、そして主人公セント・クレア (St. Clair) を魅力的で誠実で情熱的な家庭教師として提示することによって、エドマンド・バーク (Edmund Burke) の『国民議会議員への手紙』 (*Letter to a Member of the National Assembly*, 1791) で軽蔑的に描かれた家庭教師批判を切り崩すさまを、さらには、『新エロイーズ』的状況が是認・推奨されていることによって『セント・クレア』が急進主義小説に収斂していくさまを、論じたい。

## I

『セント・クレア』が『若きウェルテルの悩み』と『新エロイーズ』を下敷きに見ていることを見てみよう。『セント・クレア』は書簡体小説であり、形式的には『若きウェルテルの悩み』をそのまま踏襲している。つまり、『新エロイーズ』のように複数の人物が互いに手紙を書き送るというのではなく、主人公のセント・クレアがスイスに住む旧友に宛てた一方通行の書簡という体裁をとる。しかも『若きウェルテルの悩み』において、重要な局面では主要人物同士が直接手紙を交わし、さらに物語の最終部分では「編者」による客観的叙述が挿入されたように、『セント・クレア』においてもセント・クレアと女主人公オリヴィア (Olivia Desmond) の間で直接交わされた往復書簡が挿入され、結末部では三人称による描写がなされる。

プロットの的には、主人公セント・クレアの意識に焦点をあてて眺めれば、『若きウェルテルの悩み』を枠組みとする物語となり、オリヴィアに焦点を据えると『新エロイーズ』を枠組みとする物語となる。この二つの物語がたがいにもつれ合い、絡み合い、組み合わせあって『セント・クレア』の物語を構築することとなる。『若きウェルテルの悩み』は、周知のように、主人公ウェルテルが、すでにアルベルト (Albert) という婚約者のいる、後には夫のいるロッテ (Lotte) に恋をするといういわば三角関係の物語であり、『新エロイーズ』もジュリ (Julie d'Étanges) と、彼女の家庭教師サン・ブルー

(Saint-Preux) と、彼女の夫のヴォルマール (M. Wolmar) の三者をめぐる物語である。セント・クレアはウェルテルとサン・プルー、オリヴィアはロッテとジュリ、L大佐 (Colonel Frederick L) はアルベルトとヴォルマールの二役を勤めることとなる。

『セント・クレア』が『若きウェルテルの悩み』を枠組みとする物語であることを見てみよう。かなわぬ恋に身を焦がすウェルテル同様、L家の家庭教師であるセント・クレアも、すでにL卿 (Lord L) の長男のL大佐という婚約者のいる准男爵の孫オリヴィアに激しい恋をする。セント・クレアの父親は貴族の次男であるがスイスに移住し、ジュネーヴ湖畔で農業に従事している。父親の教育方針は「遊びながら学ぶ」<sup>4)</sup> という、さながらルソーの教育理論を想起させる自由なものであり、L卿には「父親にロマンティックで時代遅れの教育をされた」(1: 23) と皮肉られる。この教育の結果、セント・クレアの友人が「君 (セント・クレア) には殆ど野蛮人といつていいくらいのロマンティックな独立した精神がある。社会の平和のために制度化された合理的な従属に君が服従するかどうか疑問だ」と述べているように、セント・クレアは、まさにルソーが称賛するような独立心、自尊心、反骨精神の持ち主となる。彼は鋭敏な感性、感受性の持ち主であり、「都会を嫌悪し」(1: 74)、ポケットに『オシアン』をしのばせ、スケッチブックを携え、野原をさ迷い歩き、自然の美しさに陶然として景色を写生する。「もし心の優しい愛情がないならば人生は耐えられない」(1: 55)、「僕のように鋭敏で熱烈な精神にとって、情熱がないならば存在は魂の死である」(1: 55-56) と叫ぶ。まさにウェルテル的人物である。彼は「まだ見ぬうちからオリヴィアの虜になっていく」(1: 76)。

オリヴィアは「教育と才能のある娘」(1: 66)、「優れた声楽家、読書家、文章家」(1: 81)、「牧師よりも学問がある」(1: 70)、「自由奔放で自然で女らしい活発さがある」(1: 77-78) と描写される。彼女は『若きウェルテルの悩み』のロッテのような受け身でおとなしやかで希薄な存在ではない。オリヴィアは非常に聡明で積極的で自分の人生を自分で切り開いていく女性であり、作者自身の理想化された姿であるとよく言われる。<sup>5)</sup> セント・クレアがオリヴィアについて出会ったとき、彼は「彼女のような人に会えば恋に落ちるだろう

……オリヴィアのような興味深い女性と知り合いになれば思考の回転が促進し、停滞している精神力が刺激されるだろう」(1: 81) と彼女の知的活力を高く評価する。やがて、セント・クレアは彼女の愛を確認し、「そうだ。僕は[オリヴィアに]愛されている」(1: 181) と叫び、「愛とオリヴィアは同義語です」と彼女に向かって宣言する。ハープを演奏しているオリヴィアがあまりにも美しいので、感受性を刺激され、衝動的に彼女の手を唇を押し当てる。彼はオリヴィアに対して「情熱、性急で熱烈な情熱を感じる」(1: 194) と友人に告白する。そしてオリヴィアには「僕たちはあまりにも様々な点で似通っているのです、そしてあなたと僕の考えがしっかりと織り交ぜられているので、別れることはできません」(1: 199) と手紙を書き送る。しかし、ウェルテルが実らぬ恋に絶望し、自暴自棄となり、ピストルで自殺したように、セント・クレアもオリヴィアとL大佐の結婚式の日取りを知ったときから「情熱と絶望に身をゆだね」(2: 192)、故郷を思い起こさせる美しい湖のほとりに立つ釣り小屋での密会を彼女に懇願する。密会の現場をL大佐に発見され、決闘となり、ピストルで胸を撃たれる。セント・クレアは血溜まりの中でオリヴィアを抱き寄せ、息たえる。情熱、感受性に殉じた彼の生きざまはまさしくウェルテル的と言えよう。

『若きウェルテルの悩み』は、ロマン主義時代にはある種の政治的意味を帯びていた。というのも、ジェイン・ウェストのような保守主義者は、『ある青年に宛てた書簡』(*Letters Addressed to a Young Man*, 1801)において、この小説は「不道徳であり……邪悪な傾向がある」<sup>6)</sup>、「途方もない犯罪的愛情を勧め、自殺を正当化するために書かれた」(*YM* 3: 140) と激しく非難する。ようするに、保守主義者は『若きウェルテルの悩み』の女主人公ロッテを、同時に二人の恋人をもつふしだらな女と見なし、この小説を不倫の情熱、性的不道徳を是認するきわめて危険で有害な書と見なした。<sup>7)</sup>

一方、急進主義作家ヘレン・マライア・ウィリアムズ (*Helen Maria Williams*) は、『ジュリア』(*Julia*, 1790)において、主人公フレデリック・シーモア (*Frederick Seymour*) に『若きウェルテルの悩み』を擁護させる。「人々はこの小説(『若きウェルテルの悩み』)には悪い傾向があると言います。そして同じ人物の中に美德と悪徳を混ぜ合わせたという理由で著者を批判しま

す……なぜウェルテルは僕たちの関心をひくのでしょうか……彼（ウェルテル）は男の感情と欠点をもっています。彼は情熱の力に従ったのです。情熱の力に影響されない人は彼を非難すればよいのです。情熱の力に影響される人はこの力が絶対的であり、打ち勝つことができないということを承知しています」<sup>8)</sup>とフレデリック・シーモアはウェルテルを我が身に置き換えて、抑え難い衝動、情熱を弁護する。このように、急進主義作家は『若きウェルテルの悩み』を、自己の感性、情熱に忠実に、崇高な感受性に殉じる高潔な主人公を描いた作品と高く評価した。シドニー・オーエンソンもウェルテル的感性、情熱、衝動、感受性に激しく共感していることは明らかである。

## II

『セント・クレア』には、家庭教師と教え子の恋愛をめぐる物語である『新エロイーズ』を想起させる関係が二つ出てくる。一つは、過去の物語として設定されている、女主人公オリヴィアの母親の一代目のオリヴィア・デズモンド (Olivia Desmond) と彼女の婚約者L卿と彼女の兄弟の家庭教師(名前は明らかにされていない)の三者の関係であり、もう一つは二代目のオリヴィア、彼女の婚約者のL大佐、L家の家庭教師セント・クレアの三者をめぐる関係である。

過去の物語から見てみよう。一代目のオリヴィアは准男爵サー・パトリック (Sir Patrick) の娘であり、相続人である。彼女の父は、L家の財産を地続きのデズモンド家の財産と統合するため、娘を隣人のL卿の後妻にする手はずを整える。しかし、彼女にはすでに愛情を誓った人がいた。彼女の愛する人は『新エロイーズ』のサン・プルーと同じく、彼女の兄弟の家庭教師であり、さらに彼女の語学の教師でもある。オリヴィアは父の命に背いて、彼と駆け落ちし、父に勘当される。彼女の夫は北アイルランドの学校教師となり、二人の間には娘が生まれ、母親と同じオリヴィアと名づけられる。一代目のオリヴィアとその夫は、『新エロイーズ』のジュリとサン・プルーのように、階級の違いとらわれず、社会の規範や慣習ではなく、自然の衝動、自己の感受性に従って真摯に、純粹に愛に生き、いわば自己の愛を完成させた。やが

て、一代目のオリヴィアは病気で亡くなる。

家庭教師の娘である二代目のオリヴィアは、「熱烈な感情、感受性に溢れ」(1: 179)、「きらめくような快活さ、活気ある態度、生き生きとした輝き、感受性に富んだ」(1: 179) 女性である。祖父のサー・パトリックが心を和らげ、かなりの財産を彼女に分与するまでは、父の乏しい収入を補うため近隣に住む若い令嬢の教育の仕事にたずさわる。祖父の相続人となってからは、比較的裕福に暮らすことができるようになり、祖父の屋敷の女主人の役目も務めることとなる。しかし彼女も母親と同じ運命を辿る。というのも、ふたたび、L家とデズモンド家の「平和と幸福のために」(2: 242)、L卿の長男のL大佐との婚約が整えられたからである。婚約後、L大佐は海外勤務のためヨーロッパ大陸へ。彼が大陸から戻ってきたら結婚式を挙げる手はずになっている。そこに、現れたのが、L家の遠い親戚にあたる家庭教師のセント・クレアである。セント・クレアはオリヴィアがL大佐と婚約中であることを知りつつ、「(彼女に) 実際に会う前からすでに彼女の虜になる」(2: 80)。オリヴィアも婚約中でありながらセント・クレアと交際することを「このように純粋な関係は妻としての私の性格に有害とは思わないし、また最も頑固な夫でさえもこのような友情には反対できないと思う」(2: 244) と二人の関係を正当化する。かくして二代目のオリヴィアも母親と同様、『新エロイーズ』的状況を反復することとなる。

オリヴィアの行動の手本は『若きウェルテルの悩み』と『新エロイーズ』であり、彼女の理想の男性は、サン・プルーやウェルテルのような人である。ところが、L大佐は「軍人であり、アイルランドの上院議員であり、内務省にも個人的影響力をもっている」(1: 26)、いわゆる体制側の保守主義的人物である。彼は「男らしく、容姿端麗ではあるが面白い人ではない……見識があり、粘液質で、分別はあるが天才ではない。感情には影響されない……審美眼よりも判断力が付与されていて」(2: 80)、「平静で落ち着きがある」(2: 240)。オリヴィアは「感情の交換、趣味の一致、態度の類似だけが愛情に永遠性を与えることができる」(2: 240) と考えている。しかし、L大佐は「私(オリヴィア) が心のなかでロマンティックに育んだ完璧な基準に達していませんでした。大佐はサン・プルーのような人でもないし、ウェルテルのような

人でもありませんでした…… [ところがセント・クレアは] 私が心のなかでもっとも価値を置いたすべてのものと一致しました」(2: 241) と、オリヴィアは理性的で生真面目で思慮分別の権化のL大佐に飽き足らなさ、物足りなさを感じ、一方サン・ブルーと同様、貴族の肩書きも財産もないが、高潔で才気煥発、情熱的で感受性に富むセント・クレアに理想の男性を認める。

オリヴィアはセント・クレアに、彼は感性の人であり、L大佐は理性の人である、と二人を比較して見せる。セント・クレアは「自分自身の精神の光によって人間性を読み解きます。理性が指摘し、美德が認可している確立された慣習や他愛ない偏見を捨て去ることを好みます。L大佐は時が認可し、経験が承認した広く一般に受け入れられた意見を支持することを好みます。あらゆる改革を非難し、体制が古いということが体制の誤りの無さの最良の証拠であると考えていることを好んでいます。セント・クレアは繊細な衝動に敏感であり、感受性、想像力に富んでいます。L大佐は賢く賢明な人ですが、私はあなた(セント・クレア)のような人でありたいと思います」(2: 124-25) とセント・クレアを高く評価する。注目すべきは、オリヴィアが提示したセント・クレアとL大佐の比較はそのまま急進主義者と保守主義者の対比となっていることである。つまり、「確立された慣習や他愛ない偏見を捨て去る」というのはまさに急進主義者の特色であり、一方「改革を批判し」、「古い体制を好む」というのは明らかにエドマンド・バークを想起させる保守主義者のそれである。そしてオリヴィアが「セント・クレアのような人でありたい」と語ることによって、彼女自身も急進主義的傾向を抱いていることが明白となる。

オリヴィアとセント・クレアは『新エロイズ』や『若きウェルテルの悩み』、『ポールとヴィルジニー』(*Paul et Virginie*, 1788、ヘレン・マライア・ウィリアムズにより英訳、1795) のような感銘を受けた感傷小説——この三冊はどれも保守主義者からは忌み嫌われた危険な作品であるが<sup>9)</sup> ——を互いに交換し、二人の間に「意見と趣味の一致」(1: 125) を確認する。実は小説の貸し借りは、二人が会う口実、二人の愛情の仲立ち、取り次ぎとしての機能を果たす。<sup>10)</sup> セント・クレアはオリヴィアに急進主義的傾向を見て取り、当時大流行したサン・ピエールのルソー主義的小説『ポールとヴィルジニー』<sup>11)</sup> を彼女にプレゼントする。この作品は彼女の趣味、気質にまさしく合うと感



じたからである。「サン・ピエールはオリヴィアのような心と想像力の持ち主のみを対象として〔小説を〕書いた。彼はオリヴィアのような人によってのみ正しく理解される。そのような人々はオリヴィアと同様、衝動と崇高な力でもって無知や誤りや偏見が抱かせた足枷をかなぐり捨てる」(2: 33) と、「衝動」、「崇高な力」、「偏見」、「足枷」などの急進主義的用語を用いてオリヴィアの性向を分析する。二人はこのあと何度となく、「文学の趣味の一致」(2: 104)、「感性の一致にこのうえない喜びを感じる」(1: 133)、「(私たちの)感性は一緒です」(2: 127)、「私たちの内省の一致は完璧です」(2: 128) と互いの趣味、感性、主義主張がいかに関係しているかを繰り返し確認する。

ちなみに、趣味の類似・一致に関しては、保守主義作家と急進主義作家は当然のことながら捉え方が異なる。たとえば、保守主義作家のジェイン・ウェストの『女友達の話』(*A Gossip's Story*, 1796)において、女主人公メアリアン・ダドリー (Marianne Dudley) とエドモンド・クラームント (Edmund Clermont) の感性、趣味の一致が「こんなにすばらしく意見が一致するなんて——二人とも情熱的な田舎の称賛者であった。二人とも優しいハーブの音にそして同じように、牧歌的なまた挽歌の詩想に魅せられた。ようするに、芸術なら情熱的で上品で感傷的なものはなんでも……すべてともに魅かれた」<sup>12)</sup> と描かれているが、保守主義小説らしく、二人の人間の間に関係が完璧な一致などありえないというきわめて現実的な立場から、彼らの関係は冷笑的に、否定的に描かれている。また『女友達の話』から強い影響を受けたと推定されているジェイン・オースティン (Jane Austen) の『分別と多感』(*Sense and Sensibility*, 1811) においてもメアリアン・ダッシュウッド (Marianne Dashwood) とウイロビー (Willoughby) の趣味の一致が「二人はお互いにダンスと音楽を愛好し、……あらゆる点でおよそ見方が一致することをたちどころに発見した。彼らの趣味は驚くほど似ていた。それぞれが同じ本、同じ一節に心酔した」<sup>13)</sup> と皮肉な筆致で描かれている。

『新エロイズ』のジュリ同様、オリヴィアが積極的に情熱的に自発的に恋する女性であることを見てみよう。セント・クレアとの交際に関しても積極的に行動するのは、オリヴィアのほうである。たとえば、二人が初めて道で会ったとき、セント・クレアは目礼して通り過ぎようとするが、オリヴィ

アは彼に積極的に話しかけ、一緒に散歩する。セント・クレアが手にオシアンの詩集を持っているのを見て、「この詩は心の詩。感受性を与えられている心は、詩の美しさにこの上なく活気づくでしょう」(1: 96) と言い、さらに続けて「オシアンを散歩の友にする人は見栄からそんなことをするはずはありません。オシアンを趣味で読む人は非凡な人です」(1: 96) と自分たちが感性の点で一致すること、読書の趣味が同じであることをそれとなく伝える。

また、当時婚約していない男女が直接手紙を交わすのは、大胆な行動であり、礼節に反すると考えられていたが、オリヴィアのほうからセント・クレアとの文通を開始する。手紙のやり取りを一時止めると決意したときにも、機会を見つけて彼の手に手紙を滑り込ませる。書簡の中で彼女は「あなたの性格、才能、美德、あなたの興味深い憂愁を帯びたお姿を拝見して、私はあなたに秘かな共感を覚えました」(2: 64-65) と書き、「なるほど私は [L大佐と] 婚約していますが、セント・クレアの永久に変わらない友人であることには変わりありません」(2: 66) と宣言する。自分が共感し、感動した個所に下線をほどこした『若きウェルテルの悩み』をセント・クレアに貸して、「彼に意見と趣味が一致していることを示唆した」(1: 125) のもオリヴィアの方である。セント・クレアは、オリヴィアが下線をほどこした『若きウェルテルの悩み』を読むことにより、「彼女が自分の隣に座って一緒に本を読んでいるように感じ……彼女がウェルテルの言葉で僕に話しかけているのかと思うほど」(1: 133-34) と感激する。

さらに、オリヴィアはハープやピアノの演奏に優れた腕前を発揮するのであるが、L大佐の前では音楽的には正確だが感情のこもらない弾き方をし、セント・クレアが耳を傾けているときには「自由奔放で感情に訴えるような」(1: 121) 演奏をしてセント・クレアの感受性、情熱を刺激し、彼の心を魅了する。このようにして、オリヴィアはすでに婚約者がいるにもかかわらず、真に愛するセント・クレアに自分の気持ちを明白に、積極的に表明していくのである。そして、結婚式の前日に釣り小屋で会いたいというセント・クレアの懇願に「あなたは私を破滅へと誘う」(1: 203) と一応は拒否するものの、『新エロイズ』のジュリのように、彼に対する情熱、衝動、本能に忠実に、社会通念に背くことをものともせず、結局オリヴィアは彼との密会に同意す

る。オリヴィアの自己の愛に積極的な姿は『新エロイズ』に関する議論にも明白に現れている。

### III

『新エロイズ』をめぐる議論を見てみよう。この議論は、オリヴィアとL大佐とセント・クレアの三者の間でなされる。セント・クレアは「恋する男が自分の愛する女性のことを考えるために、彼女のもとを立ち去ったということ述べたのはルソーだったと思います」(2: 138) とか、「ルソーは楽譜を転写することによって、いかにして生計をたてることができたのか」(1: 219) とルソーに思いをめぐらすルソー崇拜者であり、当然のことながら『新エロイズ』の愛読者でもある。

ある日セント・クレアは『新エロイズ』をポケットにしのばせて散歩し、この本を戻すという口実でオリヴィアと会う約束をする。『新エロイズ』が家庭教師と教え子の性的関係を情熱的に讃美した作品であることを想起するとき、ここでこの小説がセント・クレアの手によってオリヴィアの住む屋敷に侵入していくのは極めて象徴的な意味をもつ。<sup>14)</sup>外出していると思われたL大佐が在宅しており、『新エロイズ』の貸し借りの現場を目撃されてしまう。L大佐は重々しい口調で「あなた(オリヴィア)はエロイーズを読んでいるのですか」(2: 109) とたずねる。オリヴィアは「再読するつもりです」(2: 109) と答え、続けて「『新エロイズ』は私たちが熱心に読む本です」(2: 109) と言う。それを聞いて、L大佐は、この本には「言い訳を許さない過ちがあります……この本を読む女性は墮落しています」(2: 109)、「ルソーの文体はルソーの主義以上に危険です。……ルソーの主張の邪悪な傾向は、華麗な言語という優雅な衣の下に隠されています……ルソーの感傷的な魔術によって多くの美しい人々が不幸になりました」(2: 111) と「ルソーの著作は恥知らずな悪徳へと直接導く。……文体は輝しく、生き生きとして熱狂的であると同時に放縦で冗漫なので、下品な文章になっている」<sup>15)</sup> というエドモンド・バークのルソー批判を想起させる口調で、この作品を弾劾する。L大佐の『新エロイズ』批判を聞いて、オリヴィアは「この小説以上に、道德の規模におい

てより高くそびえ立っている作品を私は知りません。……ルソーは私たちの心に美德をしのびこませます。私たちがその主義を採用するように導くのです」(2: 111) と、『新エロイーズ』が道徳的に卓越した作品であると主張する。

『新エロイーズ』の女主人公ジュリ(エロイーズ)に関しても、L大佐は「エロイーズは……優雅で情熱的で才能豊かだが犯罪的です」(2: 112) と断じる。これを聞いてセント・クレアは、「悪徳とエロイーズをひと括りにするのですか」(2: 112) と反論する。L大佐はいかにも保守主義者らしく、「悪徳と美德の厳密な境界を定義することは難しいだろう。しかし、エロイーズはたしかにあの場合有罪です。社会に与えた影響を考慮に入れれば、犯罪と言ってもよい。もし美德がその性質において、状況と境遇によってのみ判断されるほど恣意的なものならば、もっとも罪深い人でさえもその犯罪を情状酌量されるかもしれない。……エロイーズは無実ではありません」(2: 112) と、ジェイン・ウェストやハナ・モア(Hannah More)などの当時の保守主義者たちが、『新エロイーズ』を攻撃する際に用いる鍵語である「美德」、「悪徳」という用語を使用して、『新エロイーズ』のもっとも許しがたい点は悪徳と美德の混同であると主張する。セント・クレアは、L大佐が「熱烈な情熱がいかに不謹慎であるか」(2: 113) と語るのを聞いて、「L大佐はいつも常識の味方であり」(2: 114)、理性の人であって、決して感性の人ではないと再確認する。

セント・クレアはゲーテを引きあいに出し、「ゲーテだけが、この主題(愛)に関してルソーの競争相手にふさわしい。この二人の文体にうっとりとしなない人々に同情します」(2: 118) と『新エロイーズ』を熱っぽく弁護する。熱弁をふるうセント・クレアの姿を見てオリヴィアは気持を昂ぶらせ、「頬が紅潮する」(2: 118)。L大佐は「ルソーとゲーテの文体の影響は、理性と内省が働けば、つかの間のものにすぎません。ゲーテは自殺を弁護できないし、ルソーは誘惑を情状酌量することができません……ウェルテルは私たちには抑え難い情熱の不幸な犠牲者と見えます。ウェルテルが示した実例は、彼の性格が魅力的で人好きがするので、より一層危険です。そしてサン・プルーは無邪気な人の誘惑者として、法律の違反者として、危険です。もし私に指導している若い友人がいるならば、その人には、この二人の作品は決して読まないように勧めます」(2: 118-19) と反論する。それに対してオリヴィアは、

「ゲーテとルソーほど私が楽しく読める小説家はいません。二人は私の心に向かって話しかけてきます。私の見解を広げてくれます。私の心を自由にしてくれます。そして私と同胞を結びつける慈善・博愛の絆を強化してくれます」(2: 118-19) とL大佐に反駁する。セント・クレアは、持論を堂々と主張するオリヴィアには「違反に挑みかかる無意識の優れた雰囲気がある」(2: 118-19) と感心する。

セント・クレアとオリヴィアが『新エロイーズ』を積極的に弁護し、一方保守主義者L大佐は、ルソーの小説が不道德であり若い女性を惑わす危険な書であると弾劾するさまを見た。『新エロイーズ』をめぐる議論を通して、セント・クレアとオリヴィアは自分達の趣味、主義が一致していることを再確認し、よりいっそう二人の絆は強まる。一方この議論をきっかけに、オリヴィアは婚約者L大佐との間にさまざまな不一致・不調和、違和感・相容れなさが存在することを、より鮮明に意識することとなる。

#### IV

セント・クレアが本能、衝動の命ずるままに男爵の孫娘オリヴィアに対する自己の愛を貫き、危険な書と言われる『新エロイーズ』、『若きウェルテルの悩み』を積極的に弁護し、称賛するきわめて急進主義的言動をとる青年であることを見てきた。それでは彼はいかなる家庭教師なのか。彼は家庭教師という仕事をどのように捉えているのか。セント・クレアの雇い主のL男爵はセント・クレアの親戚、より正確に言えば、父の従兄弟にあたる。セント・クレアは、父の死後母と妹を養うため、仕事の手を求めてスイスからアイerlandに住む親戚のL男爵のもとにやってきた。たまたまL家の家庭教師が辞職した直後だったので、そのあとを継ぐ形となり、最初は「小さな従兄弟たちの教育を喜んでおこなった。そしてこの仕事を大いに関心をもって遂行した」(1: 111)。

しかし、彼は家庭教師の仕事を、「僕が軽蔑している男の不安定な尽力によってのみ得ることができる仕事」(1: 114) と定義し、「このような人 (L夫妻) の寛大さのもとに僕は投げ出され、依存している」(1: 48)、「[家庭教師

という] 依存した状況に耐えられない」(1: 22)、「(僕は) 性急で気短で独立心が強いので、私利私欲と高慢という動機によってのみ行動する男 (L男爵) に、意に反していつまで仕えることができるのか疑わしい。そしてその男は僕を依存状態に留め置くことによって、私利私欲と高慢を満足させている」(1: 114)、「(仕事が) 義務となった瞬間から、家庭教師という仕事の特徴は倦怠と不本意となる」(1: 111)、「生徒の親はそのしつこさ、気まぐれ、反対によって僕をうんざりさせる」(1: 111) と語る。つまり、セント・クレアは、家庭教師という仕事が雇い主の気まぐれに依存する、極めて不安定で従属的な仕事であると認識している。

「L卿はセント・クレアに親切ではなかった」(2: 200)、「セント・クレアはもっとも近い親戚の家庭におりながら、人々の敵となり、友人は一人もいなかった」(2: 204) という描写から明白なように、L夫妻はセント・クレアを親戚の若者というよりはむしろ、一介の使用人としてきわめて冷淡に扱う。L夫妻はセント・クレアの優れた才能に気づきもせず、「彼の精神の独立は傲慢と見なされ、彼の私利私欲の無い性質はロマンティック」(2: 206) とあざ笑われる。セント・クレア自身も「L夫妻と一緒にいることが僕にとってこれほど興冷しで、退屈で、つまらないことはなかった」(1: 124) と述べ、彼らが夫人の実家を訪問するために屋敷を留守にしたとき、「鎖からの解放」(1: 155) と喜ぶ。

セント・クレアは、『新エロイズ』のサン・プルーが、「僕は魂の奥では高貴でありながら境遇においては卑しい」とジュリに向かって嘆いたように、知的には卓越しているが、社会的には曖昧で従属的な家庭教師という立場に身をおいていることを鋭く意識し、その立場からL家ひいては、周囲の貴族階級の低俗さ、墮落腐敗を指摘する。たとえば、「岩、急流、森、山々などの崇高で美しい自然に囲まれているのに、煤煙と騒音と歓楽にまみれた都会特有の軽薄な……娯楽を追い求める」(1: 74) と、L家の人々が田舎に都会と同じ楽しみを求めようとする愚かしさを批判する。また、L令夫人のことを「階級と富裕が重要で……顔に表情が現れるのは、僕が貴族階級のお客の意見に反対して、あえて僕独自の意見を述べるときです」(1: 21) とか、「L令夫人は意見というものが無い。会話は陳腐な意見の絶え間ない繰り返し」(1: 22) とか、

「社交界の流儀は退屈で、平凡で不合理だ」(1: 32)、「この社交界は堪え難い。会話は低調で、あじけない、陳腐で退屈。内省によって強化されてもいない。高尚な感情によって清められてもいないし、才気によって活気を与えられてもいない。文学的観察によって豊かにもされていない」(1: 82)、「僕の感性がここの人々の陳腐な考えにいかにも有害であるか、君(セント・クレアの文通の相手)なら判断がつくだろう」(1: 112)、「偏狭で俗悪で狭量な人々」(1: 113)、「ここの人々は偏狭で狭量……彼らは僕を隷属状態におとしめる。彼らは僕に反乱を起こすように刺激する」(2: 72-73)、と「偏狭」、「狭量」、「隷属状態」、「反乱」などの急進主義者好みの用語を用いて貴族階級の知的水準の低さ、知的不毛ぶりを批判的に語る。このセント・クレアの発言は、シドニー・オーエンソンが家庭教師をした際に体験した屈辱感、不満、憤り、怒り、虚しさの表明とも言える。また、フランス革命、アイルランド暴動などが続いた当時のヨーロッパの政治状況を思い起こすとき、貴族階級の腐敗墮落ぶりを激しく非難・攻撃するセント・クレアの上述の言葉は、極めて急進主義的響きを帯びていることはあらためて指摘するまでもない。ここには、家庭教師をしつつ『セント・クレア』を執筆中の、十九世紀初頭の野心的で急進主義的な若き女性家庭教師、シドニー・オーエンソンの生の声が、情念のほとばしりが、危険なほど小説の表面に浮上して来てはいまいか。

## V

一七九〇年代、一八〇〇年代において、家庭教師と教え子の身分違いの恋愛を称賛することは、ある意味できわめて政治的な意味をもつ。というのも、エドマンド・バークが『国民議会議員への手紙』のなかで、『新エロイーズ』に登場するサン・プルーを暗に批判しつつ、「教師は従来は真面目で尊敬すべき人物であったのに、……今や教え子に言い寄る男になってしまった」(LM 316)、「家族の大変な信頼を裏切り、女性の教え子を墮落させる」(LM 316)、「教師の情事を防ぐ防壁が崩れ落ち、貴族家庭がもはや本来の気品に満ちた誇りと健康な家族的偏見の保護を失ってしまえば、恐ろしい墮落まではほんの一步である。……フランスの第一級の家庭の女性たちは、ダンス教師、ヴァ

イオリン弾き、婦人仕立屋、美容師、従僕……など、家庭に侵入し、職務上半ば家族同然となっている者たちの、餌食となり、正規の関係や不法な関係によってその家庭と混じりあうことが可能だ……彼ら（フランス国民議会議員）は、法制上は両者を平等な身分にした。ルソーの意見を採用することで……〔階級の〕平等化計画が完成する」（*LM317*）と家庭教師の倫理的墮落とそれに必然的に伴う階級の混乱化という事態を憂慮した。ようするに、エドモンド・バークは、平民の家庭教師サン・プルーによる貴族の娘ジュリの誘惑が、伝統ある階級組織を傷つけ、階級の混乱化を招き、家庭を崩壊へと導くと主張した。

エドモンド・バークと同じ政治的基盤に立つジェイン・ウェストは、『不信心な父親』（*The Infidel Father, 1802*）のなかで家庭教師を邪悪で節操のない人物として描いた。また、チャールズ・ロイド（Charles Lloyd）も『エドモンド・オリヴァー』（*Edmund Oliver, 1798*）のなかで、家庭教師のルイス・クレア（Lewis Clare）と屋敷の娘キャロライン（Caroline）との身分違いの恋愛を挿話的に挿入し、保守主義小説らしく、二人が結局生活に行き詰まって自殺するさまを描く。つまり、エドモンド・バークに思想的枠組みを与えられている保守主義者は、家庭教師を家庭内に侵入し主人の娘を誘惑し家庭を崩壊に導く悪人として描く。

一方、急進主義作家は、たとえばシドニー・オーエンソン自身は、『奔放なアイルランド娘』で女主人公グローヴィナ（Glorvina）の家庭教師を務めるホレーシオ（Horatio）を、誠実で情熱的で信頼に値する人物として描き、教え子と教師の恋愛を非常に好意的に描写した。またメアリ・ヘイズ（Mary Hays）の『偏見の犠牲者』（*The Victim of Prejudice, 1799*）に登場する家庭教師レイモンド氏（Mr. Raymond）も、ルソー主義者で非常に高潔な人物として描かれている。さらに、メアリ・ロビンソン（Mary Robinson）の『ウォルジingham』（*Walsingham, 1799*）に登場する家庭教師ウォルター・ハンベリー師（Rev. Walter Hanbury）も、主人公ウォルジinghamに「優しい先生」<sup>16)</sup>、「父親以上の存在」（*W 1: 217*）と慕われる非常に善良で情け深い人物として描写されている。

上述のような家庭教師をめぐる文脈を念頭に置いて『セント・クレア』を



見るとき、シドニー・オーエンソンがこの作品においてエドモンド・バークの描く否定的・侮蔑的な家庭教師像を切り崩し、一矢報いようとしたことはきわめて明白である。つまり、家庭教師セント・クレアは誠実で知的で才能豊かな青年であり、貴族階級に横柄で不当な扱いを受けて階級差別に苦しむ人物、つまり、エドモンド・バークが描く家庭教師像とはまさに対極に位置する人物として描かれている。一方、エドモンド・バークが、家庭教師を初めとする不埒な使用人によって墮落させられると心配する、雇い主側の貴族は、卑劣で無教養で腐敗墮落した階級として提示されている。また、セント・クレアの男爵の孫オリヴィアに対する身分違いの恋愛は、抑え難い、必然的な、真摯なものであって、けっして意図的に「教え子を墮落させ」、「家庭を崩壊に導く」ものではないことを示した。エドモンド・バークの描く家庭教師像に対するシドニー・オーエンソンの怒り・反発には、先に見た通り、彼女の個人的な体験、すなわち、父を財政的に援助するために住み込みの家庭教師をした際の経験の反映もあっただろうことは、いまさら指摘するまでもない。

シドニー・オーエンソンは『セント・クレア』において、枠組みとして用いた『新エロイズ』と『若きウェルテルの悩み』という二つの急進主義的感傷小説を、主人公のセント・クレアとオリヴィアに小説中で熱狂的に是認、称賛させることによって、さらには家庭教師とその情熱的な恋愛をきわめて好意的に、読者の共感をよぶ形で描くことによって、シドニー・オーエンソンなりの急進主義小説を構築したと言えよう。

\*本研究は、文部省科学研究費（平成12年～平成14年度、一般研究 (c) (2)「ロマン主義時代の英国小説に対するエドモンド・バークの影響」課題番号12610502）の研究助成を受けたものである。

## 注

- 1) Dale Spender, *Mothers of the Novel* (London: Pandora, 1986) 307-08; James Newcomer, *Lady Morgan the Novelist* (London: Associated UP, 1990) 20.
- 2) Colin B. Atkinson and Jo Atkinson, "Sydney Owenson, Lady Morgan: Irish Patriot and First Professional Woman Writer," *Eire-Ireland* (Summer 1980): 78.
- 3) Atkinson 81; Newcomer 84-5; Joseph W. Lew, "Sydney Owenson and the Fate of Empire," *Keats-Shelley Journal* 39 (1990): 39.
- 4) Sydney Owenson, *St. Clair; or, the Heiress of Desmond*, ed. Peter Garside, 2 vols. (London: Routledge, 1992) 1:112.
- 5) Carol Hurt, "Sydney Owenson, Lady Morgan" in *British Reform Writers, 1789-1832*, eds. Gary Kelly and Edd Applegate. *A Dictionary of Literary Biography*, vol. 158 (Detroit: Brucoli Clark Layman, 1996) 237.
- 6) Jane West, *Letters Addressed to a Young Man*, 3 vols. (London, 1801) 3: 137. 以下、*YM*と略記。
- 7) Marilyn Butler, *Jane Austen and the War of Ideas* (Oxford: Clarendon P, 1975) 28; Marilyn Butler, *Maria Edgeworth: A Literary Biography* (Oxford: Clarendon P, 1972) 318; Robert Palfrey Utter and Gwendolyn Bridges Needham, *Pamela's Daughters* (1936; New York: Russell and Russell, 1972) 127; Nicola J. Watson, *Revolution and the Form of the British Novel, 1790-1825: Intercepted Letters, Interrupted Seductions* (Oxford: Clarendon P, 1994) 34; Markman Ellis, *The Politics of Sensibility: Race, Gender and Commerce in the Sentimental Novel* (Cambridge: Cambridge UP, 1996) 220.
- 8) Helen Maria Williams, *Julia: A Novel*, 2 vols. (London, 1790) 2: 203.
- 9) Peter Garside, Introduction, *St. Clair; or, the Heiress of Desmond*, xviii.
- 10) Hurt 239.
- 11) Jane Spencer, *The Rise of the Women Novelists: From Aphra Behn to Jane Austen* (Oxford: Basil Blackwell, 1986) 161-2; Gary Kelly, *Women, Writing, and Revolution 1790-1827* (Oxford: Clarendon P, 1993) 56-58; Butler, *Jane Austen and the War of Ideas* 141.
- 12) Jane West, *A Gossip's Story*, 2 vols. (London, 1796) 1: 205.
- 13) Jane Austen, *Sense and Sensibility*, vol. 1 of *The Works of Jane Austen*, ed. R. W. Chapman, 6 vols. (London: Oxford UP, 1965-67) 47.

- 14) Garside xviii.
- 15) Edmund Burke, *Letter to a Member of the National Assembly*, vol. 8 of *The Writings and Speeches of Edmund Burke*, ed. L. G. Mitchell (Oxford: Clarendon P, 1989) 317. 以下、*LM*と略記。
- 16) Mary Robinson, *Walsingham; or, The Pupil of Nature*, ed. Peter Garside, 4 vols. (London: Routledge, 1992) 1: 217. 以下、*W*と略記。